

主体的な学びと協働的な学びで、 小学校にバトンタッチ !!



東金市立公平幼稚園園長 いちはら じゅんこ 市原 純子

1 はじめに

本園は3歳児1クラス、4歳児1クラス、5歳児2クラス、全園児90名の園である。近年、外国籍の子供や、特別な支援が必要な子供が増えていることから、言語や発達の課題に配慮したきめ細かな指導支援が求められている。

幼児教育は、教育課程や指導計画に沿った遊びや活動全体を通して総合的に行われている。本園では、さまざまな体験によって、子供の主体性が育まれるように、一人一人の発達段階や個性を見極めた接し方や環境構成に努めている。

2 主体的な学び

園庭の花壇でカマキリを見つけた3歳児。「あっ、横向いた」「手を横にしてる」「片足になった」とつぶやきながら、カマキリの後を追っていく。カマキリが花の裏側に入ってしまうと、「どこがお家なのかな」「何、食べるのかな」と疑問に思ったことを教師につぶやいている。教師は、「どこかしら」と一緒にカマキリの動きを見つめている。近くにいた5歳児が「虫、トンボ食べるよ」と教えてくれた。「トンボ？飛んでたよ」と空を見上げるが、見つけれずに残念な様子。翌日も園庭に出てすぐに花壇を探し始めた。カマキリの生態に興味を持ち観察する中で、『食事』『家』等自分に置き換えて考え、命やその不思議さに気付くことは、主体的な学びである。教師は、子供一人一人の興味・関心を引き出し、寄り添いながら、感性や思考力等の非認知能力が育まれるような言葉がけや援助を心がけている。

3 協働的な学び

今年度は、常設プールでの遊びが再開した。5歳児が『自分たちで遊具を作って遊ぼう』と話し合い、皆で乗れるいかだ作りが始まった。ペットボトルを接着するが、接着部分に水が入って沈んでしまう。再度話し合い、皆で修理をすると大成功。また、その姿を見て憧れを抱いていた4歳児に、5歳児が新たに作り、プレゼントした。一人では作れない大きないかだを友達と協同制作したことで、互いの考えを出し合い作り上げた充実感や試行錯誤する力、やさしさ等を学ぶことができた。この経験が、小学校教育の土台となる10の姿に繋がっていくと考える。



課題として、園児数は今後減少傾向にあり、協働的な学びを保障するための人的環境は厳しく、工夫が必要となっている。

4 おわりに

「主体的」「協働的」どちらの学びであっても、全職員で子供や保護者に温かな眼差しを向け、伴走者となって成長を促すよう心掛けたい。子供、保護者、園の三者で成長を喜び合う関係を作りあげていくことは、幼児教育の質の向上にもつながると考える。